

境内の北、旧中山道に面したところにある、伝道掲示板の令和3年3月に掲載するものを紹介します。

伝道掲示板

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。經典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺はblogに載せています。

九月のことばは仏教經典の中でも最も古いといわれる『スッタニパータ』からです。古いということばは、後世の手垢がついていない。おのれの主張に合うように釈尊のことばを脚色してないから明快です。言ってみれば、防腐剤もはいらず、瓶にはラベルも貼ってない、蔵出しの生一本といったところでしょうか。

—生まれがあなたをつくるのではない。今のあなたの行為が自己自身を作っていく—。いやな事が続く今だけ、読んだだけでスッキリしませんか。バラモンというのは、古代インドで最高の地位をいいます。

よく知れた有名なことばなのですが、忘れかけていた名句を思い出させてくれたのは、奈良興福寺貫首・多川俊映師がこの四月からNHKラジオ「宗教の時間」の講師をされていて、そのテキスト『唯識・心の深層をさぐる』でした。定価1045円の本だから、新刊で買えばよいのですが、ついであって825円でネットの古書店から買いました。

古書とはいえ綺麗ではあるのですが、ラジオ講座の第一回放送分の冒頭の十個所ほどに赤鉛筆で線が引かれています。良い気分ではありません。古書ですから仕方のないこと。パラパラと後のページをめくっていくと読んだ形跡はありません。このテキストを最初に買った人は、講座の第一回の冒頭をきいて、諦めたのでしょうか。唯識(ゆ



いしき)は難しいのです。

唯識は奈良時代(八世紀)に中国から伝えられた「法相宗」の教えで、薬師寺や興福寺、京都の清水寺も唯識です。

正直に白状すれば、わたくしは「唯識」が、わからない。わからないから、わからないと思って、多川師の著作だけで数冊もっています。が、よくわからない。なぜかというと、禅とは真逆の方向にあるから。どうということかという、禅は中国で育てられた体験の仏教です。それにたいして、唯識はインドで生まれた大乘仏教の壮大・精緻な論理を伝える教です。

体験と論理ですから、距離がある。距離をどうにか縮めようとおもって、わかりやすく唯識を語ってくれた多川師の本を読んでいます。九月のことばにした名句の前に多川師は漱石の『草枕』の一節を引きます。「生まれによって賤しい…」の現代語訳ともいえます。「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない、やはり向こう三軒両隣にちらちらするただの人である」。

最初は、このことばを九月のことばにしようかと思ったのですが、ただでさえ仏典の言葉がすくない松岩寺の伝道掲示板ですから、最も古い經典のことばを採用したという次第です。

書き去り 書き去り

落葉のように花園にたまった

九十八篇。

たのしんで読まれ いやいや読まれ

おもしろく読まれ しかたなく読まれ

読まれ 読まれて

枯葉のように何処かへ舞ってしまった

九十八篇。

集められてこの一巻となる

おとした垢を見せられるようで

自分では 見る気もしないが

誰かが 読んでくれようか。

いいでしょう。どなたかが、「宗教的天才は文学的天才をかねる」という名言を書いていたけれど、無文老師はまさしく宗教的天才であり、文学的天才であった。

さて、今回の私の拙い『花園』誌の連載を読んで、知人が無文老師の文学的天才を物語る逸話を教えてくれました。花園大学に在学中の知人が父親を突然に亡くした。故郷へ帰ると無文老師に報告に行くと、次のような俳句を即興でつくり、出された抹茶の懐紙に毛筆でさらさらと書いたという。

夏萩の／花こぼるがに／泣きたまへ

ちいさな懐紙は、知人の大きな宝ものになっているのだらう。

【九月のことば】

生まれによって賤しい人となるのではない。生まれによってバラモンとなるのではない。行為によって賤しい人もなり、行為によってバラモンとなる。

「ブッダのことば(スッタニパータ)」より

この四月から、妙心寺派の月刊誌『花園』の巻頭ページを担当しています。毎月、千字ほどの短文です。なぜ、『花園』という名前の月刊誌かというと、妙心寺は花園上皇(1297~1348)が開基(かいき)、言ってみればスポンサーとなって建てたお寺だから、そのご恩を忘れないために、妙心寺関係のものには、花園が冠せられることが多い。

月刊『花園』ですが、ながい歴史があるから、執筆してきた方も膨大でしょう。多くの執筆者のひとりに、昭和の名僧と慕われた山田無文元妙心寺派管長(1900~1988)がおられます。ご著書『わが精神の故郷』によれば、無文老師は愛知県に生まれ、若い日に法律家を目指して上京、早稲田中学へ進学する。しかし、「学校の授業中にもひそかに『法華経』や『歎異抄』やバイブルを読んでいるような生徒になってしまい」、旧制高校の入学試験には不合格、あけくに結核で生死をさまよったのち、出家得度。病身が完全に回復するまでの間、京都の臨済宗大学(現花園大学)で禅宗学を学ぶ。京都に出ても「日曜日にはかならず、黒い衣(ころも)を着たまま教会へ通った」という。

そんな無文老師も『花園』誌を執筆されていました。「坐禅和讃講話」というタイトルで、松岩寺でも法要の時にみなさんと一緒におよみする「白隠禅師坐禅和讃」の解説を昭和二十年後半から六年以上にわたって連載されています。それが一冊の本にまとまった時、「はしがき」として次のような詩をかいておられます。

たのしんで書き くるしんで書き

よろこんで書き しかたなく書き